

虎の絵と金屏風

1 虎図(とらず)

趙廉 筆 中国 明時代 (15-16 世紀) 絹本淡彩 掛幅装 160.6 cm×87.2 cm 松井文庫所蔵



趙廉(ちょうれん)は明時代の中国浙江省湖州出身の人。虎の絵を得意とし、世評も高かったと伝えられています。中国において虎は四神(青竜・朱雀・白虎・玄武)の一つとして、古来から画題として用いられ、日本の虎の絵にも大きな影響を与えました。

本図は、画面左上方から右下方にかけて大きく虎を描き、上方に松、下方に岩石や草を配しています。虎は身体をくねらし尻尾をはねあげて、観者を見据えるように前方を向いています。体毛を墨や代赭(たいしゃ 赤色の顔料)などの細線で一本、一本ていねいにあらわすなど、全体に端正に描かれています。

※参考文献『松井文庫の絵画と書蹟』(熊本県立美術館)

2 鍾馗図(しょうきず)

雪村周継(1504-1589) 筆 室町時代末期(16世紀)

紙本墨画淡彩 掛幅装 99.5 cm×113.7 cm 松井文庫所蔵



鍾馗は、疫病退散の神様です。中国・唐の皇帝玄宗が病に苦しんでいたとき、鍾馗が夢にでてきて悪鬼を退治したら、病気が治ったという伝説から、疫病退散の神様として信仰されるようになりました。作者の雪村周継は戦国時代に活躍した画家。一見すると、虎と戦っているようにみえますが、実は虎と遊んでいるのだそう。

3 虎図(とらず)

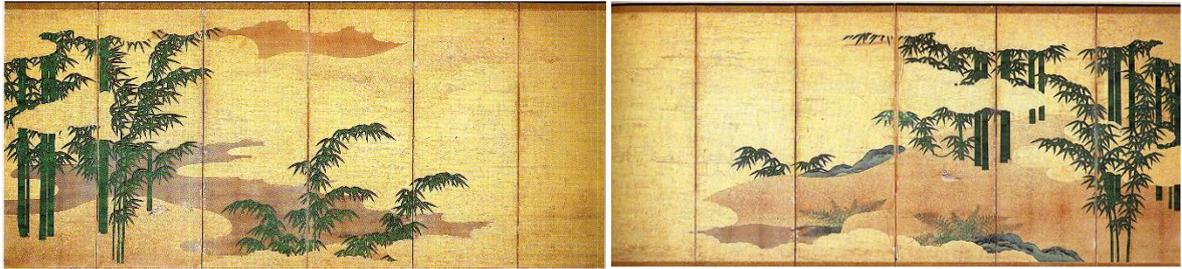


朝鮮 李朝時代 絹本墨画淡彩 掛幅装 135.0 cm×56.4 cm 松井文庫所蔵

朝鮮において虎は、悪鬼(あつき)の侵入を防ぐ辟邪神(へきじゃしん)として広く認められており、虎の絵は、歳画(ねんが 正月に民家の門や室内に飾る絵画)として、おおいに制作されていました。本図は、画面中央に虎を描き、上方に松の木と二羽の山鵲(さんじゃく かささぎの一種)、下方に岩を配しています。当初は、虎に彩色をほどこしていたと思われるのですが、現在では剥落して縞模様部分の銀泥のみが残っており、細墨線による丁寧な下書きが認められます。松の葉や樹幹は、強い墨線で的確に描かれています。このような強い筆致や斜めに突き出した岩の形態などは、李朝の絵画にしばしば見受けられるところです。※参考文献『松井文庫の絵画と書蹟』(熊本県立美術館)

4 竹に千鳥図屏風（たけにちどりずびょうぶ）

土佐派 江戸時代前期（17世紀） 六曲一双 紙本金地著色 各 167.3 cm × 361.4 cm 松井文庫所蔵



画面いっぱいに竹を数株ずつ配置し、その間に盛りあげで装飾した金雲をめぐらす意匠性豊かな屏風絵です。右隻に一羽、左隻に三羽の千鳥（ちどり）が配されています。左隻に月が出ていて、その下の千鳥が眠っていることから、夕暮れの場面を描いていることがわかります。金の雲は、実は夕霧の表現です。

空中に浮かぶような竹の根元の表現、整理された笹の葉、水の波紋の様式的にまとめられた美しい表現、千鳥や羊歯（しだ）の細密な描写から、土佐光起（とさみつおき）（1617-91）を含む江戸時代前期の土佐派画人によって描かれたものと考えられます。※参考文献『松井文庫の絵画と書蹟』（熊本県立美術館）

5 老松に瀧図屏風（おいまつにたきずびょうぶ）

矢野派 江戸時代（17-19世紀） 六曲一双 紙本金地著色 各 164.4 cm × 358.0 cm 松井文庫所蔵



※写真は右隻

老松を主題とした金屏風。右隻の右側に瀧が描かれ、水流は左隻まで続いています。一双（右隻と左隻）によって作り出される中央の空間が絶妙です。松の葉は一本、一本、ていねいに描かれています。作者は不明ですが、肥後細川藩の御用絵師矢野派の作と考えられます。

松井家の記録によると、江戸時代中-後期に活躍した矢野良勝（1760-1821）は、八代城内の障壁画を多数制作しています。松を主題とした障屏画は、鎌倉時代（14世紀）にはすでに描かれ、室町時代（15世紀）には明・朝鮮への進物品として松の金屏風が制作されました。さらに桃山・江戸時代（16-17世紀）になると、狩野光信（かのうみつのぶ）の「松図」（妙法院）、狩野探幽（かのうたんゆう）の「松に孔雀図」（二条城二の丸御殿）など、障壁画の名作が生み出されるようになりました。

6 洛中洛外図小屏風（らくちゅうらくがいずこびょうぶ）

※写真は右隻

江戸時代前-中期（17-18世紀） 六曲一双 紙本金地著色 各 78.6 cm × 263.2 cm 松井文庫所蔵



京都市中および郊外の風景や市民生活を描いたものを洛中洛外図と言います。本作品は江戸時代前期から中期にかけて制作されたと考えられる洛中洛外図

です。右隻には、清水寺、八坂の塔、八坂神社（祇園社）など京都市中が描かれています。左隻に描かれるのは宇治です。中央に平等院鳳凰堂を配し、全曲に宇治川が流れるように描きます。水辺の水車、宇治川を船で往来する人々、従者をしたがえて宇治橋を渡る馬上の武士などが印象的です。